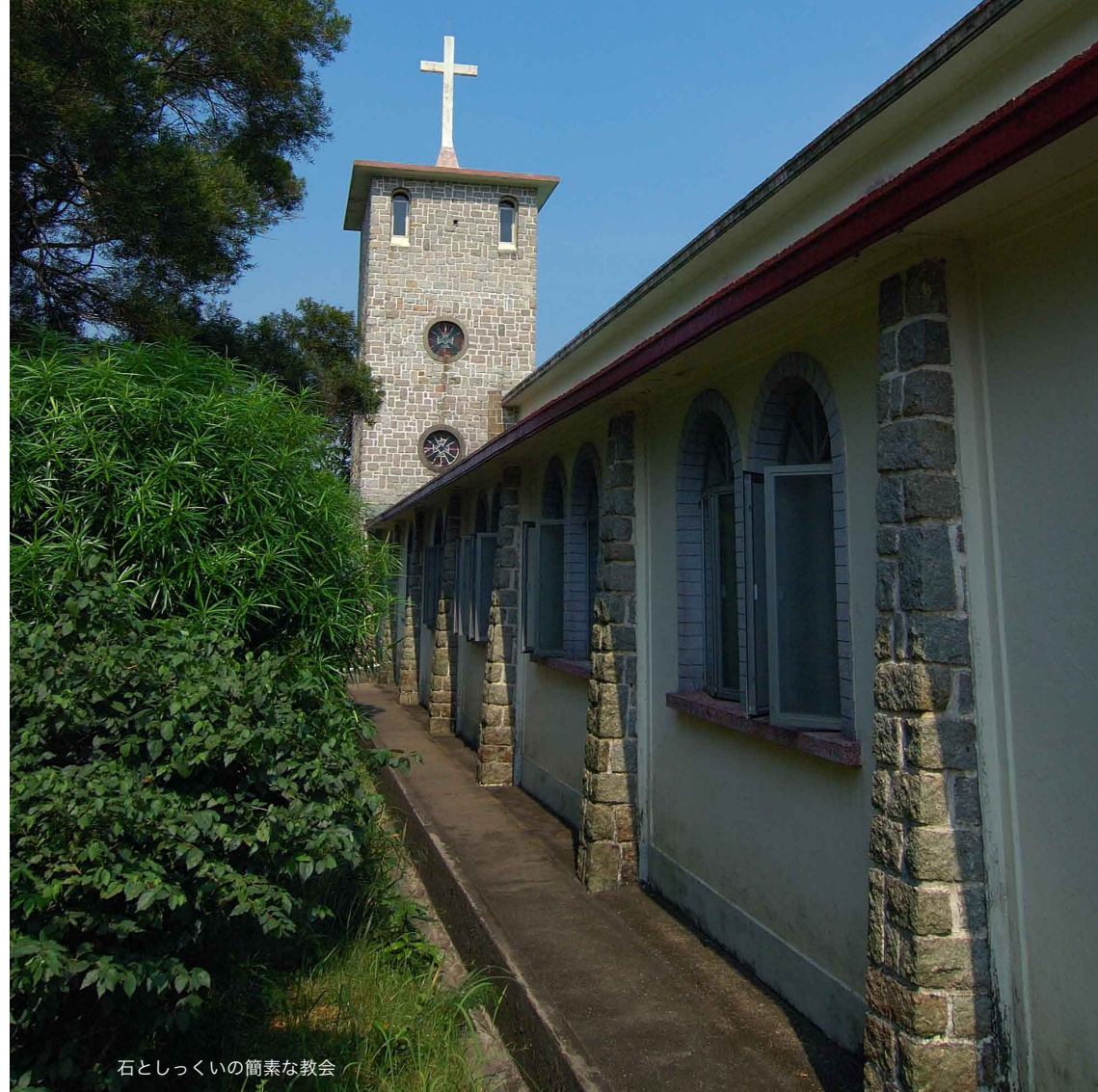


香港の離島に流れる静穏の時



石とシックい簡素な教会

トラピスト修道院

Our Lady of Joy Abbey



「トラピスト」と聞いて日本人が連想するのは函館のトラピスト修道院だろうか。同院が作るバターやクッキーは北海道の名産品としてよく知られる。香港にも小ぶりながらトラピスト修道院がある。香港国際空港が位置するランタオ島の Our Lady of Joy Abbey (熙篤会聖母神楽院) だ。島の東岸、大水坑山腹に広がる敷地に、小さな教会、修道所、聖母像、牛舎跡などが点在し、そこには訪れる者をほっとさせる不思議な静穏が満ちている。

トラピスト会、別名厳律シトー会は11世紀末にフランスで生まれた修道会を源流に持つ。現在、世界にある同会の修道院はおのの独立しているが、神父、修道士たちが、聖ベネディクトの戒律により禁欲的な生活を送るのはどこでも同じようだ。

香港のトラピスト修道院は1950年代初頭、布教活動が制限された中国本土を離れた修道士たちによって建てられたもの。俗世間を離れた自給自足の暮らしを旨とする修道士たちにとって、離島の、豊かな水をたたえるこの谷川沿いの土地はまたとない選択だったに違いない。

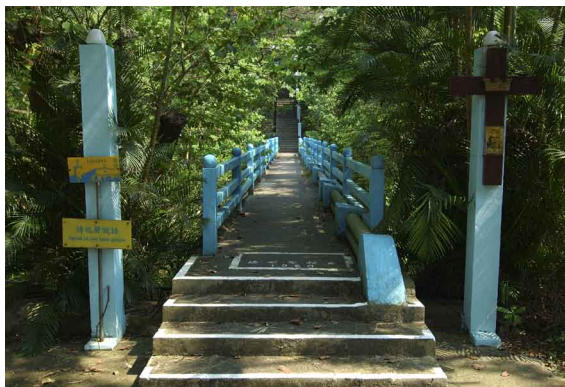
57年にはオーストラリアから15頭の乳牛を買い入れ、乳製品の生産を開始。谷川による水力発電で電気を起こし、牛乳の殺菌、冷蔵を行ったという。この修道院で作られた「十字牌」牛乳は香港ブランドとして、牧場が中国の深圳へ、工場が新界の元朗へ移った今も人気が高く、高品質牛乳の代名詞となっている。

さて、この修道院へ行くには少々手間がかかる。まず、中環の離島行きフェリー乗り場を出発点とするなら、愉景湾行きか坪洲行きの船に乗り込む。目的地に着いたら街渡と呼ばれる小さな船に乗り換え、修道院下の埠頭で降りる。

埠頭からもう一頭張り。修道院に続くだらだら坂を登るのだ。一定の間隔をおいて、樹の幹にローマ数字が書かれた十字架が打ち付けられている。それぞれにキリストの肖像画が貼られ、初めは十字架を担いでいたキリストが、つまずき、十字架に貼り付けられ、と変わっていく。キリストが十字架を担いでゴルゴダの丘へ向かったという苦難の道を想定しているのだと分かる。坂は「苦難」にはほど遠いかもしれないが、上り切るまでに15分



「石上」修道院への坂の樹に打ち付けられた十字架
 「左上」礼拝堂の内装は質素だが調和のとれた美しさがあり、とくに梁の形が印象的
 「右下」教会から香港島を望む。手前の小島は坪洲
 「左下」修道院へ続く橋の入口には14番目の十字架と「お静かにどうぞ」と書かれた板がかかる



20分ほど。夏場なら汗が吹き出る。最終の14番目、キリスト復活の絵が貼られた十字架は教会へ続く橋の入口にある。橋の下は谷川だ。涼しい川風が頬をなでる。せせらぎと鳥の音が聞こえ、蝶が間近を飛び交う。坂を上ってほてった体が癒される。

そうしてたどり着く小さな教会はじつに簡素だ。外壁は石とシックいだけ。内部も装飾はほとんどない。祭壇の聖母とキリスト像は金属の棒で輪郭を辿っただけのもの。純粹に祈るための空間。ここに住む信者たちの生活が垣間見える。

神父や修道士たちは毎朝3時30分に起床し、夜8時に就寝する。1日7回の折禱を行い、合間には野菜作りや工芸品製作などの労働、また学習もこなす。敷地内では関係者の姿はほとんど見かけず、声も聞こえてこない。黙想を重んじ、仲間内で話すときは手話に頼ることもあるという修道士たち。あまり姿を見せないのは部外者との不必要な接触を避けるためかもしれない。

静けさの中に人が暮らし、日々思索を続けている。訪れてふと安堵するのは、それを感じ取ってだろうか。

笠原宗彦(文)